
21 世紀ドイツのナチ映画が描く“良きドイツ国民”像

——新旧「白バラ」映画の比較考察を中心に——

古川裕朗（広島修道大学）

2000 年以降のドイツ映画に関し、その主流を形成する論調としては、作品の国家横断的(transnational)あるいは多国間的(international)な物語構造を重視する立場がある。このような視点はナチを題材とした作品を解釈するときにも適用される場合があり、例えば、ドイツ=ユダヤの物語をそうした国家横断的・多国間的なものの文脈において読み解こうとする試みが、その一つである。こうした流れは、東西ドイツの統一以降顕著になってきたナチ映画の消費主義的な傾向とも合流する。その場合、国家横断的・多国間的な物語構造が、スペクタクル性、メロドラマ性などのエンターテインメント的な物語要素を取り込んだ結果、ナチの物語は没政治的に享受することが可能になったとも主張される。

一方において 2000 年代のナチ映画にナショナルな要素が存在していることを強調する立場もある。例えば、亡命や抵抗運動を行う主人公の中に道徳的・人道的な価値観の体現を読み取り、それを言わば“良きドイツ国民”の範例として理解する視点がそうである。

しかしながら、本発表者が近年のナチ映画を観察したところ、これらの国家横断的・多国間的な要素とナショナルな要素とは必ずしも相互排他的な対立関係にあるとは言えない。というのも、良きドイツ国民の姿は、主として他国民(他民族)との協力やその救済の物語の中に、しかもドラマチックに描き出されているからである。国家横断的・多国間的な要素とナショナルな要素とはむしろ逆説的にも、新たな政治的有意性を相乗的な形で生み出しているように見える。このような視点は、現代ドイツのナチ映画研究に関して、これまであまり強調されてこなかった視点のように思える。

本発表ではこうした観点から、ドイツ映画“Sophie Scholl: Die letzten Tage”(2005 年ドイツ映画賞作品賞銀賞)の解釈を行い、映画の中の“良きドイツ国民”の姿を明確化することを目指す。このような試みは、21 世紀ドイツのナチ映画がいかなる精神的方向性に根ざしているか、このことを解明するのに寄与するがゆえにその意義は大きい。

映画“Sophie Scholl”は「白バラ」というナチへのレジスタンス活動を行うグループの物語で、主人公のゾフィーが大学構内でビラを撒き、逮捕尋問され、そして処刑されるまでを描く。この作品を取り上げるのは、エンターテインメント的な物語要素を含みつつ、主人公がドイツとヨーロッパという重層的な文脈の中に道徳的・民主主義的理念の体現者として描き出されているからである。なおこの作品を特徴付けるにあたっては、同じく「白バラ」を題材とした 80 年代の二作品、“Fünf letzte Tage”と“Die weisse Rose”との比較考察に重点を置いて行いたい。